

# 薩南諸島におけるスナギンチャク目および イソギンチャク目の種多様性

藤井琢磨

## Preliminary Report of Diversity of Order Zoantharia and Actinaria in the Satsunan Islands, Kagoshima

FUJII Takuma

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター  
*Research Center for the Pacific Islands, Kagoshima University*

### 要旨

2015年4月27日から2015年11月11日にかけて、与論島、加計呂麻島、奄美大島、喜界島、小宝島周辺浅海にてイソギンチャク目およびスナギンチャク目を対象にした種多様性調査を行った。外部形態による簡易同定の結果、スナギンチャク目16種、イソギンチャク目22種の生息を確認した。記録には分布地域未記録種である可能性が高い個虫・群体も多く含まれる。今後、解剖学的観察や遺伝解析による種同定を伴った、標本に基づく正確な分布記録を行う必要がある。

### はじめに

六放サンゴ亜綱（刺胞動物門：花虫綱：六放サンゴ亜綱）は、浅海から深海まで世界中の海底環境から見つかる海洋底生動物の一群である。温帯など寒冷になる海域と比べ、温暖なサンゴ礁海域で種多様性が高くなると考えられる。しかし、国内における種相の推移は明らかにされていない。

本研究では、奄美大島周辺海域においてスナギンチャク目およびイソギンチャク目の種多様性に関する基礎知見の収集を目的として、野外での出現記録を行った。

### 方法

2015年4月27日から11月11日にかけて、与論島、加計呂麻島、奄美大島、喜界島、小宝島周辺浅海にて調査を行った。調査は磯歩き、素潜り、スキューバ潜水によって行い、六放サンゴ亜綱のうち、主にスナギンチャク目とイソギンチャク目の出現状況の観察記録を行った。発見された生体は、まずデジタルカメラによって生態の記録を行った（付着基質、生時の色彩、触手の長さ、触手数など）。傷つけずに採集可能な生体は、FUJII and REIMER (2011) および HÄUSSERMAN (2004) に従い、形態解析用標本および遺伝解析用組織片の作成を行った。本報告における種同定は、外部形態および生態情報に基づく簡易同定のみを行った。

## 結果と考察

与論島では、スナギンチャク目 5 種、イソギンチャク目 2 種が観察された。フジマメスナギンチャク *Zoanthus* aff. *vietnamensis* は鹿児島本土や沖縄島からの記録はあるものの、その中間となる与論島からの過去の分布報告は無い。

奄美大島および加計呂麻島からは、スナギンチャク目 9 種、およびイソギンチャク目 18 種の生息が観察された。カワギンチャク *Isaurus tuberculatus* 等スナギンチャク目 3 種は、四国以南の分布域において奄美大島周辺からの報告が欠けている (ONO *et al.* 2008)。ウンバチイソギンチャク *Phyllo-discus semoni* の分布域は沖縄島以南とされるため、今後の調査次第では当島が分布北限域となる可能性がある (HOEKSEMA and CROWTHER 2011)。クマノミ宿主となるイソギンチャク類、*Entacmaea* 属や *Heteractis* 属は分類学的混乱が知られ、標本の精査に基づく分類形質等の再検討が求められる (e.g., 柳 2006)。

喜界島からは、スナギンチャク目 6 種、イソギンチャク目 5 種が確認された。ウメボシイソギンチャク科未同定種は、今後、内部形態の観察も含めた分類学的精査が必要となる。

宝島からはスナギンチャク目 7 種、イソギンチャク目は 1 種が確認された。オキナワニセマメスナギンチャク *Neozoanthus uchina* は徳之島以南が分布域とされる。トカラ列島周辺浅海域における六放サンゴ相の知見は極めて少なく、六放サンゴ相の推移を考察するためには更なる調査が求められる。

過去には、薩南諸島からはスナギンチャク目 11 種が記録されている (e.g., ONO *et al.* 2008)。本調査では区別がつかなかった種や深海性の種の存在を考慮すれば、本報告における奄美大島周辺海域でのスナギンチャク目 9 種の観察記録は、網羅的な種多様性評価に近いと考えられる。イソギンチャク目は知見が少なく、過去との比較が困難である。サンゴ礁域ではスナギンチャク目と比べて局所的ないし低密度に生息することもあり、正確な種多様性評価には網羅的な調査が求められる。

本報告は目視やデジタル画像による観察記録である。今後、本調査結果を活用し、標本に基づく正確な分布記録を行う必要がある。特にイソギンチャク目は科など高次分類群レベルでの同定にも解剖学的解析が必要となる場合も多いことから、正確な分布記録を行うには分子系統解析および解剖切片の観察が不可欠となる。

## 引用文献

- FUJII, T. and REIMER, J. D. 2011. Phylogeny of the Highly Divergent Zoanthid Family Microzoanthidae (Anthozoa, Hexacorallia) from the Pacific. *Zoologica Scripta*, 40: 418-431.
- HÄUSSERMAN, V. 2004. Identification and Taxonomy of Soft-Bodied Hexacorals Exemplified by Chilean Sea Anemones; Including Guidelines for Sampling, Preservation and Examination. *Journal of the Marine Biological Association of the UK*, 84: 931-936.
- HOEKSEMA, B. W. and CROWTHER, A. L. 2011. Masquerade, Mimicry and Crypsis of the Polymorphic Sea Anemone *Phyllo-discus semoni* and Its Aggregations in South Sulawesi. *Contributions to Zoology*, 80: 251-268.
- ONO, S., REIMER, J. D. and TSUKAHARA, J. 2008. Ecological Survey of Zooxanthellate Zoanthid Diversity (Hexacorallia: Zoantharia) from Kagoshima, Japan. *Kuroshio Biosphere*, 4: 1-16.
- 柳 研介 2006. 相模灘のイソギンチャク相と本邦産のイソギンチャク分類の現状について. *国立科博専報*, 40 : 114-173.